

史実を軽視して英雄忠臣を美化する平泉流の人物史の問題点は言うまでもないが、「英雄の
 実像」を描き出す人物史も、歴史学者が期待するほどには世間に受けない。「英雄と言われて
 きたけど、実はそうでもないんだよ」というスタンスがネガティブに映るからだろう。なら
 ば、信長や龍馬といった有名人ではなく、無名の人物に光を当てていくべきではないだろう
 か。ベストセラーになった磯田道史氏（一九七〇）の『武士の家計簿―「加賀藩御算用者」
 の幕末維新』（新潮社、二〇〇三年）の主人公、猪山直之は全く無名の存在であり、英雄的な
 ところがまるでない。しかし、彼の実直さ、懸命さは多くの読者の心を打った。私たちと同じ
 平凡な人間の等身大の生き方が、そこにあったからである。

昔ながらの「畏敬の人物史」だけでなく、こうした「共感の人物史」がもっとあってもいい
 と思う。そして、無名の人物を発掘することにかけては、歴史学者は歴史小説家に後れを取る
 ことはないと思ふのだが、いかがであろうか。

（東京大学大学院学術研究員／国際日本文化研究センター客員准教授）

女優・浪花千栄子の関係資料

古川 綾子

昨年末、一九七三年に亡くなられた女優・浪花千栄子さんの関係資料を思いがけず譲り受け

ることになった。

この一〇年ほど古書店などで浪花千栄子に関係する資料をなんとなく探していた。インターネットの掲載誌や出演作のVHSテープやパンフレットをとりあえず購入しておくだけのいい加減な探し方だが、関係者でなくても収集できる資料はある程度集まっていた。ただ、できることなら確認したいと思っていった写真は一枚も見つけられずにいた。出演した映画やテレビドラマのスチール写真は古本屋にもあり、NHK大阪放送局が保管するラジオドラマ「お父さんはお人好し」関係の写真はかなり残っており見せていただけだが、一九六五年に出版された自伝『水のように』（六芸書房）の巻頭二七頁に及ぶ口絵写真五九枚に含まれる幼少期の写真や松竹家庭劇に入団する以前の香住千栄子時代の写真、自宅兼料亭「竹生」でのオフショットなど、残っているのであれば見てみたい写真と一致するものはなかった。

秋から日文研に勤務すると決まった時、「竹生」があつた嵐山に近い職場に通うことになったのだから、いい加減ではない探し方に切り替え、「竹生」のことも調べ直して、松竹家庭劇・松竹新喜劇時代の浪花千栄子について考察しておきたいと思った。その矢先、「竹生」に保管されていた写真六五九枚と雑誌の切り抜き一七点（合計六七六点）をほぼ初対面の方から譲り受けた。大阪府立上方演芸資料館で学芸員をしていた一四年間にも何度か経験したことだが、探していると見つけれられず、諦めたり視点を切り替えるとひょっこり目の前に現れる、資料収集の不思議な展開に感謝している。

昭和三〇年代から四〇年代にかけて、浪花千栄子が関西を舞台にした映画やドラマに欠かさない女優だったことは知られているが、それ以前の二〇年間は、松竹新喜劇（一九二八年から一九四六年までは松竹新喜劇の前身の松竹家庭劇）の看板女優として活躍していたこと、松竹

新喜劇の看板女優ということとは上方喜劇界における女優の草分け的存在を意味することはあまり知られていない。日本の喜劇の歴史は、一九〇四年二月に大阪の道頓堀・浪花座で元歌舞伎役者の曾我廼家五郎と十郎が曾我廼家兄弟劇を旗揚げしたことに始まる。一九一四年に五郎と十郎は袂を分かち、天性の喜劇役者といわれた十郎と、名脚本家兼プロデューサーとして手腕を発揮した五郎は、それぞれが劇団を率いて競い合うことで喜劇を発展させた。一九二五年に十郎が病没すると、五郎は「日本の喜劇王」と呼ばれるようになり、一九四八年に亡くなるまで喜劇界に大きな影響を及ぼした。歌舞伎出身の曾我廼家五郎は女形にこだわり最後まで女優を起用しなかったが、曾我廼家五郎劇に対抗させるために松竹が二代目渋谷天外と曾我廼家十吾に要請して結成された松竹家庭劇では、当初から松竹所属の女優が舞台上に立ち、石河薫や浪花千栄子などの実力派女優は男優と同じように看板スターとして扱われた。

浪花千栄子は一九三〇年に松竹家庭劇に入団して間もなく天外と結婚しており、看板女優として座長の妻として劇団と天外を二〇年間支えたが、一九五〇年に天外から恋人の妊娠を理由に離婚を迫られて、劇団に残ることも許されず、家庭と仕事を失い、大阪を離れて京都の知人宅に身を隠した。劇団にとっても浪花の脱退は痛手であり、天外は批判にさらされるが、翌年一月に道頓堀・中座で初演した「桂春団治」が評判を呼び、脚本家渋谷天外の名を一気に高めることに成功した。従来の勧善懲悪を基本とする曾我廼家劇とは一線を画する新しい「文芸的」な喜劇だと劇評家に絶賛され、この作品を契機に松竹新喜劇は全国展開していく。

そんな中、浪花千栄子の松竹新喜劇退団を喜んだであろう人物がいた。当時、吉本興業で唯一人の専属芸人として戦前同様に活躍していた花菱アチャコである。現在では松竹と吉本の芸人が同じ舞台に立つことはめずらしくないが、一九三九年に松竹の傍系会社・新興キネマ演芸

部が吉本で一、二を争う人気漫才師のミスワカナ・玉松一郎を引き抜いたことから激しい対立が始まった。一九四二年に新興キネマは解散して、吉本も戦火で寄席を失い、アチャコしか芸人がいないという状況になっても、松竹と吉本の芸人が共演する機会はごく限られていた。まして浪花千栄子は松竹新喜劇の看板スターだった。

花菱アチャコは一九三〇年から四年間、横山エンタツとコンビを組み、現在のような会話中心の近代漫才のスタイルを確立したのち、別のコンビを経て、戦後は一人でコメディアンとして活動していた。一九五一年秋、NHK大阪放送局から翌年一月開始のラジオドラマの主演を依頼された際、大阪弁が普通に話せて、自分のアドリブに当意即妙な対応ができる相手役として、松竹新喜劇を退団した浪花千栄子を起用してほしいと強く主張した。誰にも居場所を告げずに消えた彼女を見つけることは容易でなかったが、銭湯通いが一般的だった時代、担当プロデューサーは彼女の通っていた銭湯を探し出し、アチャコの思いを伝えて浪花千栄子を表舞台に連れ戻すことに成功した。

アチャコの目論見通り、浪花の自然でやわらかい響きの大阪弁は、それまでのラジオで流れていた漫才で使う、強い言葉や口調を前面に押し出した大阪弁と違って、アットホームなラジオドラマにふさわしいものだった。「アチャコ青春手帳」(一九五二年一月〜一九五四年四月)ではアチャコの母親役を、続く「お父さんはお人好し」ではアチャコと夫婦を演じて好評を博した。一九五四年二月から一九六五年三月まで、「お父さんはお人好し」の放送回数は五〇〇回を数え、長寿番組として放送史に記録されている。浪花の言葉は「なまり」があり本来の大阪弁ではないと指摘されることもあったが、ラジオの影響により、浪花の話す大阪弁こそが上品で理想的な大阪弁だとマスコミに取り上げられるようになるまでに時間はかからな

かった。

その傍ら、一九七三年に亡くなるまでの約二〇年間に二一六本の映画に出演しており、溝口健二監督作品「祇園囃子」（一九五三年）ではブルーリボン助演女優賞に輝いた。船場の気丈な女主人から下品な老婆まで幅広い役をこなした浪花は、雑誌のインタビュアーで自分の演技について、松竹新喜劇時代の鍛錬の賜物だと説明している。喜劇ならではのアドリブはもちろん、座長の妻である以上、看板スターでも自分がいつも主演だとほかの女優に示しつかないので、誰もやりたがらない老け役や汚れ役を率先して演じなければならず、結果的に様々な役を演じる上で勉強になったと自伝にも書き残している。

女優として成功の兆しが見えた一九五三年には嵐山の天龍寺近くに一八〇坪の土地を購入して、女優を引退してから生活に困らないようにとの考えから、自宅を兼ねた料亭「竹生」を開業した。浪花の人気と知名度の高まりとともに、「竹生」の経営も軌道に乗り、六〇代後半を迎えても女優として多忙な日々を送っていたが、夜に「疲れた」と言っただけで床に入り、そのまま目覚めることなく、一九七三年一月二二日に六六歳で急逝した。

さて、冒頭の話に戻りたい。写真と切り抜きを譲ってくださった方は大阪府箕面市在住の女性である。昨年九月下旬、箕面市公民館のシニア市民講座で上方喜劇について話す機会を得て、普段であれば藤山寛美やミヤコ蝶々のような、より知名度が高い人を取り上げるのだが、日文研での勤務が決まり浪花千栄子のことが気になっていたので、彼女と松竹新喜劇について話をさせてもらった。それから三カ月経った一二月下旬、箕面市の講座の担当者の方から、講演を聴いておられた方が浪花千栄子さんの資料を保管しておられ、必要でしたら差し上げた、不要ならそのまま破棄してもらって構わないと言っておられるが、どうしますかと連絡を

いただいた。ともかく所有者の方に連絡させていただきたいと伝えたところ、先方としては役に立つような写真かどうかかわからないので写真を見てから説明したいと言っておられるのととで、担当者の方が仲介してくださり、一月二五日の午前中の宅急便で自宅に資料を送っていた。

小脇に抱えられるほどの箱にびっしり詰まった資料が届き、すぐに電話で連絡をとらせていただいた。どんな経緯で保管されていたのか、もしかしてご親戚なのだろうかなど、失礼ながら期待が高まっていたのだが、お話は全く違う、切ないものだった。女性の甥御さんが二〇数年前に嵐山で観光用人力車の車夫の仕事をしていた時、解体工事中の邸宅の前の道を通りかかったら、「この写真、捨てるんやけど、誰かいらんかな」と解体工事中の作業員の方に話しかけられて、見てみると古い女優さんの写真だとわかったのでこういうものが好きな叔母さんに見せてあげようと思い、その場で貰ったものだという。浪花千栄子没後の「竹生」については明らかでないことも多く、これまでに「お父さんはお人好し」のプロデューサーや花菱アチャコの関係者から話を聴いたところ、ご家族はいまも不自由なく生活しておられると思うが、「竹生」はいいつの間にか閉店して取り壊され、ご家族と連絡もとれなくなってしまうたことだった。

解体作業中に出てきた写真を見て、そのまま破棄するのは忍びないと思われたのだろうか、通りかかった人力車夫の青年に託された資料が箕面市の女性の元へ届き、二〇数年の時を経て、私の目の前に現れた。映画やドラマの撮影風景や、大阪と東京にあった後援会の集合写真や、贅をつくした「竹生」の庭園で撮影された雑誌の取材写真など、仕事関係とプライベートの写真が入り交じっており、自伝の口絵写真に使われた九枚も確認できた。浪花千栄子の足跡